予科練平和記念館だより

平成22年2月開館

予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください

やわらかな青色の空に、白いシロツメクサが映える季節となりました。この花が咲いているのを見ると、つい四つ葉のクローバーを探したくなります。みなさんはいかがお過ごしでしょうか。

今月号は、去年インタビューを撮影させていただいた人たちの中から、台湾より予科練習生となった劉連輝さんのお話をご紹介します。

●台湾の予科練習生

劉さんは昭和2（1927）年台中生れの82歳。包み込むようなあたたかい笑顔とフレンドリーな雰囲気で、どんな人とでもすぐに仲良くなってしまいそうです。予科練戦没者慰霊祭のために来日なさったところをお願いしてお話をうかがうことができました。流暢な日本語でお話してくださいましたが、戦争を知らない者にとって驚きも多く、また考えなければならないことがたくさんありました。

台湾は、17世紀大航海時代にはオランダの植民地でした。その後、明王朝の漢民族の父と日本人の母を持つ鄭成功（1624－1662）が一時オランダを排除しましたが、満州民族の建てた清王朝に敗れ、清の属国となります。しかし日清戦争で清が敗れると日本に割譲され、以後日本が敗戦を迎えるまで統治下におかれていました。

「私の家はね、農家でした。サトウキビを植えたり、モミを植えたり。父が教育を重視していて、当時の農家としては珍しく教育を受けさせてくれました。…私は中学3年のときに学徒出陣しました。戦争は一番厳しいときで、中等学校に通っている私みたいな若い人はたくさん軍隊に行きました。兵隊さんがたくさんほしいときで、もちろん日本の人は全部徴兵制度があって兵隊に行ってますけど、台湾人はあの時徴兵制はしていません。だから志願兵として軍隊に入りました。日本の人は、軍隊に入るときはぱっと直接軍隊です。私たちの場合はそうじゃないの。軍隊に入る前に『志願兵訓練所』というのがあって、そこで3か月なり6か月なりの訓練を受けて、それから正式に海兵団に入団できたんです。私は昭和19年の8月に海兵団に入団しました。」

劉さんが入った『志願兵訓練所』は、台湾南部の都市高雄にありました。ここは、台湾人の志願兵に対して日本語や日本の生活習慣、日本軍の軍人としての考え方などを教育するところでした。指導にあたる日本の軍人は厳しく、つらい思い出もたくさんあるそうです。

「…3000人の志願兵のうちから200人ぐらいが学科試験を受け、体格検査して、50人パスして予科練に入りました。当時海軍の兵隊として成績が良かった人を、班長とか分隊長とかそういう人が認めて、あ、お前予科練の試験行ってこい、と。…私は昭和2年生まれだから、私の戸籍登記では日本人になってるわけ。小学校から日本教育を受けて中学3年で海軍志願兵に入ったけれども、日本はあの時、皇民化教育（天皇の民である当時の日本人に同化させる教育のこと）を強化した。この教育が非常に功を奏したわけ。だから私が中学3年のときに、自発的に、あ、俺はのうのうとして学校なんかで勉強をしてはいけないと。国はこんなに戦争で困ってるんだから、私たち若い者も学校をやめて戦争のお手伝いをしなければいけない、というような考えを持っていたわけだ。この時代の私たちは。だからもちろんこれは強制されたのではない。私に言わしたらね、皇民化教育がよかったわけ。だから自発的に志願兵になって、海軍に入って。で、海軍で成績が良かったから、結局は教官から推薦されて予科練試験に行ったわけ。…もちろんうれしかったですよ。3000人の中から選ばれた50人ですから。とってもうれしかった。これひとつとね、七つボタン（予科練習生の制服。詰め襟に金のボタンが七つついていた）というのはもう若い人の憧れでした。…日本、台湾、同じように憧れでした。というのは、飛行機乗って空の上を飛び回ってそれで敵と戦うんだから。これよりもう若い少年の心をかきたてたものはありませんよ。だから、特に僕たち（台湾の）第1期の予科練になったんですから、あれだけおった台湾の青少年のうちで選ばれた最初の50人だから、すごく自分も光栄に感じてましたし、喜んでました。」

▲台湾から入隊した予科練習生（日本名で呼ばれた）

（次号に続きます）